
魔法の森の古道具屋さん

葛根湯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の森の古道具屋さん

【Nコード】

N4263J

【作者名】

葛根湯

【あらすじ】

魔法の森。

そう呼ばれるこの森は、常に禍々しい瘴気と化け物茸の胞子が漂っており、普通の人間、いや、妖怪さえも安易には近寄らない。

その入り口にひっそりと佇む古道具屋、香霖堂。

今日も、薄暗い店内に来客を告げるベルが鳴り響く……

東方projectの二次創作です。

一応霖之助視点……かな？

連載小説となっておりますが、一話完結の形式で書いていくつもりで

५.

努力家二人

魔法の森。

そう呼ばれるこの森は、常に禍々しい瘴気と化け物茸の胞子が漂っており、普通の人間、いや、妖怪さえも安易には近寄らない。その入り口にひっそりと佇む古道具屋、香霖堂。今日も、薄暗い店内に來客を告げるベルが鳴り響く。

「やあ、いらっしやい」

「おつす香霖、また来たぜ」

「なんだ、魔理沙か」

金髪のロングヘアーに白と黒を基調とした服を着こなし、その小柄には不似合いな大きさの魔法使いの帽子を被る少女は、並べられた品に見向きもせず僕の机に腰を下ろした。

「座るならそこにある椅子にしてくれないか」

「それより面白い物を見つけたんだ、見たくないか？」

これだ、この魔法使いは人の話を聞かない。いや、この事は彼女に限った事ではないが。しかし、面白い物が……気になるな。

以前”鉄くず”と言って宝剣を持って来てくれたこともあったし、彼女のことだ、今回も期待できるかもしれない。

霖之助は読んでいた本を畳むと、彼女に視線を向けなおす。

彼女もそれを待っていたのかにっこりと微笑むと、懐に手を伸ばした。

「これは……？」

魔理沙が取り出したのは両手に納まる程度の箱。変色し、至る所に染みや亀裂が、随分長い年月を過ごしてきたのを感じさせる。

「かるただ、ほら」

箱の蓋を開くと、成程少し擦れているものの僕が以前人里で見かけた絵札と相違ないものが入っていた。

しかし、古いだけで不思議な点はどこにもない、いたって普通のかるただ。

「特に不思議なところはないが

「まあまあ、そう急かさないの。

取り合えず、今のかるたは何だ？」

今のかるた……？

彼女の言っている意味はよく分からないが、取り合えず僕の目に映るかるたはただのいろはかるただ。

旧仮名遣いから始まっているところを見ると、古典的ないろはかるただろう。

「うん、じゃあ、これがいろはかるただって事をよおく頭にいれておいてくれよ」

そう言っていたはずな笑みを浮かべると、魔理沙はゆっくりと箱の蓋を閉じた。

そしてしばらく眺めていると、突然思い出したように蓋を再び開く。

「これは……」

霖之助は思わず身を乗り出した。

確かに、確かに先程まで、魔理沙が箱の蓋を閉じるまではいろはかるただった、それは間違いない。

しかし、今僕の目に映る絵札は歌がるた、つまり百人一首に変貌していた。

「ちなみに、私はこの手の魔法は使えないぜ、勉強していないし、こんな地味な魔法は私には合わないからな。

それに、このかるたは家にあつたものだ、今まで誰にも見せていないし、今さっきまで私もこいつの事なんて頭になかった」

魔理沙が最寄の結論に釘を刺す。

彼女は嘘を言わない人間……ではないので、この言葉は信用しかねるが、仮に本当だとすると、経緯はともあれ、彼女に拾われたか買われたこのかるたは、始めから魔力を持っていたということになる。それなら納得もいくし、驚くこともない。

「君が手に入れる前に誰かが魔力をこれに込めたんじゃないのかい？ その人がどんな理由でやったかはさておき、君や紅魔館の魔女くらいの力を持っているとすれば、これくらいのことは容易いだろ
う」

しかし、彼女はその結論を待っていたかのように、得意気に人差し指を振った。

「甘いぜ香霖、これは元は普通のいろはかるたなんだ、断言できる」
「どうしてそう言い切れる？」

「そりゃあ、自分が小さい頃愛用していた玩具なんだ、当たり前だろっ」

そう言っつて箱を裏返すと、そこには小さく”まりさ”と持ち主の名前が書かれていた。

と、言うことは……。

「このカルタは、自然に魔力が染み付いた物だというのか」

「そうとしか考えられないぜ」

勝ち誇ったような表情で、魔理沙はぐつと親指を立てる。

ああ、そうか……。

霖之助はふつと笑みをこぼした。

彼女がさっきからずつと笑顔なのは、自然に……いや、自分の力で魔力を持ったかるたと彼女自身を照らし合わせていたからなのか。努力に努力を重ね、つまずいてはまた努力をする。

そうして普通の人間から魔法使いになった彼女にとって、そのかるたはそんな自分の心を理解してくれる唯一の存在なのかもしれない。

「かるた……か。久々に勝負してみないかい？」

「私とか？ 勿論受けて立つぜ！ 読み手は……まあ、適当に探し

てくるか。
ちよつと待つてて」

勢いよく机から飛び降りると、その勢いを崩さないまま扉に体当たりし、外へ飛び出していった。

やれやれ、思い立ったら一直線な性格は昔のままか。

かるたの腕はどうだろう、昔は一枚も取れなかったが……まあ、やってみてからの楽しみしておこう。

勢いよく啖呵を切ったものの、魔理沙は結局一度も霖之助の取り札を超えることができず、最後は半べそ状態になって自分の大事な理解者を床へ放り出したまま、家へと帰ってしまったのだった。

努力家二人（後書き）

また勢いのままやってしまいました。

しかも今度は二次創作、大丈夫か私……？

取り合えず、敬愛する本家様を汚す事がないよう書いていこうと思っ
ています。

感想、意見などございましたら、どしどし送ってください！

辛口でも全然構いません、むしろそっちのが（ry

それでは、今後ともご贔屓に。

本の虫

「ねえ、ここお店なんでしょう。 どうしてこんなに薄暗いのよ？」

そんな不満な言葉と共に、店の扉が開いた。

「まだ営業時間前なんだけどな」

「客が来たら開店するのがお店つてもものでしょう？」

幻想郷の住人らしい身勝手な台詞を吐くと、頭と背中に鮮やかな赤色の翼がある少女は隅に重ねた本を物色し始めた。

どうやら公言している通り、客人らしい。

「んー……あ、これなんか面白そう」

お目になかった本があったのか、少女は乱暴に本を引っ張り出す。崩れなかったのがせめてもの幸いだ。

「それだね、お安くしておくよ」

「何言っているの、ここで読むのだから買わないわよ」

何だって。

ここは立ち読み禁止だぞ。

「ここで読み終えてしまったら、その本の価値が無くなってしまっ
じゃないか」

「だって私、お金持ってないもの」

一瞬でも客だと思った自分を責める。

そしてお構いなしに表紙をめくろうとした少女から本を取り上げた。

「何するのよ！」

「そんなに本が読みたいなら図書館に行けばいいだろう。

湖の先に紅い屋敷がある、そこに図書館もあるから行ってみるといい」

「行つたわよ！ そしたらわけも分からないまま追い返されたの！」

まさか、本当に行つたとは……。

背中の翼に負けないくらい真つ赤な顔で掴み掛かってくる少女を見る限り、強ち嘘ではないだろう。

しかし、普通の妖怪なら近づかないあの不気味な館に単身突入するとは、命知らずにも程がある。

「うわーん！ 返せ返せ返せー！」

ぽかぽかぽかぽかぽかぽか

ああ、今日は厄日だ。

泣きながら力のない拳でひたすらに叩き続ける少女を見て、僕は考えるのをやめた。

くくく

「あら、動かない店主さんがこの館に訪れるなんて……パチユリ様が外を出歩くくらい信じられない事ですわ」

「客人にそんな失礼な台詞を述べるなんて、紅魔館のメイド長も落ちたものだね」

「これは失礼致しました」

銀髪のメイド服の少女は口先だけの謝罪を述べると、ゆっくりと館の戸を開いた。

さて、僕が何故こんな館に来たかだが……

「おお……で、図書館は何処、何処なの？」

原因はこの朱鷺色妖怪だ。

あの後「本を読ませてくれるまで此処を動かない！」と駄々をこねられ、拳句の果て僕のコレクションを荒らし始める始末、結局僕が折れ、紅魔館の図書館に連れて行くということで納得してもらったのだった。

「ねえ、図書館は？」

「はいはい、すまないが図書館まで案内してくれないか」

「承知致しました」

軽く会釈すると、メイド服の少女は僕らの横にひっそりと佇んでいた階段を下る。

日の届きにくい地下に引き籠もるとは、魔女というのはそんなに陰

湿なものなのだろうか。

ちなみに、魔理沙は魔女ではないらしい。

以前ふと聞いてみたところ、「私は魔女じゃなくて普通の魔法使いだ！」と怒られたのだ。

まあ、確かに彼女が陰湿とは無縁の性格なのは知っているし、似合わないだろう。

「着きましたわ」

「……凄いな、これは」

思わず生唾をのんだ。

魔理沙から広いとは聞いていたが、予想以上だ。

本棚と積み重ねられている本しかないような、壁というものが存在しないような、そんな広さだった。

「あら、ちゃんと入り口から入ってくるお客さんなんて珍しいわね」

我に返り、言葉の主の方を向くと、紫のネグリジェを着込んだ少女がこちらを向いていた。

魔理沙の話から察するに、彼女がこの主である魔女なのだろう。

「それで、何の用なの、古道具屋の主人？」

「ああ、この迷惑な朱鷺色妖怪に本を読ませてやってほしいのだが」

「迷惑は余計よ」

「……まあ、いいけど。その辺に小悪魔がいるから読みたい本を

取ってきてもらいなさい」

「わーい！」

彼女は元気よく飛び上がると、そのまま本棚へ飛び込んでいった。途端、どっと疲れが押し寄せる。

「お疲れ様、大方あの妖怪に店の品物でも荒らされそうになったんでしょ？」

「大体合ってるよ」

荒らされそうになったのは僕のコレクションだけだ。

「その御褒美って訳じゃないけど、面白い本があるの、読んでみる？」

そう言うと、魔女は本棚から一冊の本を取り出し、僕に差し出した。

「これは……歴史書か」

「そう、稗田家の複製させて貰ったの」

「……少し、少しだけ拝見させてもらおうよ」

正直疲れているからな。

いくら興味のある本とはいえ、全て読みきるほどの体力はない。少しだけ……うん、少しだけ読んだら帰ろう。それなら大丈夫だ。

~~~~~

「咲夜、いる？」

「……」

「悪いけど、紅茶を三つ持ってきてくれないかしら、あの二人、当分帰りそうにないから」

「承知致しました。……ふふっ」

「……何が可笑しいのよ」

「いえ、まるでパチュリー様が三人になったような感じがしまして」  
「失礼ね、私は寝転がったり、頬杖をついて本を読んだりしないわ」

「でも、時々本を枕にしていますよね」

「……………」

## 本の虫（後書き）

やっちまった……。。

気がついたらもう二月。

一月中に書こうと思っていたのに結局これだよ！

東方の迷宮のバカバカバカ！

……はい、すみません、次はもう少し早く書けるように頑張ります。

ご意見感想お待ちしております！

辛口〜甘口全てOKです！（え

それでは、今後ともご贖員に。

## 太陽の下

今日は久々の快晴だった。

昨日まで灰色に汚れていた空は透き通った空色になり、それを待っていたのだろう太陽が嬉しそうに光り輝く。

こんな日に薄暗い室内で本を読んで過ごすのは失礼だろうと、幼心に僕は外に飛び出した。

日の光を身体いっぱいを受け、丸まっていた身体を思い切り伸ばす。魔理沙が見ていたら「似合わないな」と笑われてしまいそうだが、紅魔館の魔女ではないのだから、僕も時にはこんな事をしたくなるのだ。

「あらあら、穴熊の店主がそんな健康的なことをしているなんて、異変の前触れかしらね」

純白の日傘を差し、清楚ながら女性らしいラインを強調させた衣服を着た少女は、くすくすと微笑みながら、人の良い気分をぶち壊してくれた。

「……珍しい、幽香が此処に来るとはね」

しかし、ここで怒ったり皮肉を言い返したりしてはいけない。

彼女、風見幽香はこの店の数少ない客人だ。

変に刺激して気分を損ねたら、こちらとしても不利益な結果になってしまうのだから。

「あら、てつきり皮肉の一つでも返してくるかと思ったけど……まあいいわ。

それより、そろそろ珍しい花の種があるだろうと思って散歩がてら

に来たの、何かあるかしら？」

散歩がてらと言いつつも、その物欲しそうな顔を見る限り、ある程度期待して此処に来たのだろう。

彼女は普段、人里で花の種やじょうろなどの用具を買い求めるのだが、時々人里には無い珍しい種を求めにこうして此処に来るのだ。

「うーむ……最近は特にこれと言って珍しい種は無いね」

「えー」

微笑む大人の表情から一転、ぷうつと頬を膨らませながら不満の表情を浮かべる幽香。

さしずめ欲しい物を買って貰えなかった子供のようである。

「本当に何も無いの？」

折角足を運んだのだ、手ぶらで帰るのは嫌なのだろう。  
再び物欲しそうな表情を浮かべながら聞き直してくる。

「うーむ……あ、ヤマユリの球根だったら少しあった気がするな」

「ヤマユリ？」

ヤマユリは最近少しずつではあるが、幻想郷で咲き始めているユリ科の球根植物である。

花はユリの中でもとても大きく、香りは甘くてとても強い。

以前霊夢が「甘過ぎよ、気持ち悪くなるわ」と嫌悪していたな。

「ヤマユリかぁ……ちょっと球根を見せて貰いたいだけけれど」

「ああ、少し待っていてくれ」

足早に店に戻ると、曖昧な記憶を頼りに探し出す。

「ここだったかな……いや、確かここじゃあ……えっと……」

「そこよ、黒い液体の入った瓶の隣」

彼女の言われた所に目を向けると、あったあった。

表面に埃を被りながら、三つの球根がひっそりと佇んでいる。

「ふうん……こんな不健康な場所に放られていたわりには、結構しつかりとしているわね」

どうやらお目になつたらしい。

優しく埃を払うと、三つ全て購入してくれた。

「毎度ありがとうございます」

「どういたしまして。」

それより、少しお茶でもしないかしら？」

霊夢みたいな事を言うと、いつの間に用意したのかお茶とお茶請けの大福を持ち、縁側に腰掛ける幽香。

「どづい風を吹き回しだい？」

「心地よいそよ風が吹いているじゃない」

笑顔であしらうと、彼女は大福を口に運ぶ。

「甘くて美味しいわ、でも、私は栗羊羹のが好みだわ」

「……………」

「ボリユームがあつて良い大福ね、でも、私は栗羊羹のが好みだわ」

「……………分かったよ、今度買っておく」

「ふふっ、よろしくね」

屈託のない笑みを浮かべると、再び大福を口に運ぶ幽香。

どうしたのだろうとつい理由を聞きたくなるが彼女の事だ、どうせ軽く受け流してしまうだろう。

普段一人でいる者は、そう簡単に自分の腹の内をあかさないものだからな。

諦めたようにため息をつくと、僕は彼女の隣に腰掛けた。

心地よいそよ風を受けながら、お茶を啜る。

「今度はいつ来ようかしら」

そう呟きながら、隣で三つ目の大福を頬張る彼女の笑顔は、何故だか店に訪れた時とは違うような、そして、その何倍も価値があるように思えた。

## 太陽の下（後書き）

やった！ 今回はあまり間を開けずに更新できたぞ！

……すみません、当たり前ですよね、はい。

今回もまた勢いで書いてしまったけれど、大丈夫かな……。

変だったらごめんよ、幽香さん。

まあ、彼女は私の敬愛するお方なので、これからもちよくちよく出すつもりでいます。

むしろ幽香×霖ゆづかりんに路線変更しようかね？

……いや冗談ですよ、霖之助さんには渡しません！

さて、馬鹿話はこの辺にして……

いつの間にかお気に入り登録をしてくれている方々がいました！

こんな拙い小説を登録してくれて本当に有難うございます！

もう感謝感激あめあられです！

そして、感想・意見もお待ちしています！

甘口〜辛口まで選べる云々でございます（え

それでは、今後ともご贖に。

## 星空の下で晩酌を

日が沈み空に黒い絨毯が敷かれると、香霖堂もそろそろ店仕舞い。読みかけの本をたたみ、店の戸に鍵をかける。

普段ならこのまま床に入るか本を読み直すのだが、今日は少し特別なのだ。

地平線の向こうに消えた太陽の変わってお月様とお星様がこんばんは。

太陽ほどではないけれど、一生懸命夜空を照らすその姿はとても健気で、なんとなく彼女を連想させる。

まだ来ないのかな、もうすぐ来るかな。

夜道を必死に駆ける彼女を思い浮かべながら、僕は提灯に火を入れる。

……。

……。

……。

まずい、あの紅魔の魔女から借りた本に思考でも侵されたか。

「面白いわよ」の言葉通り、確かに悪くはなかったのだが、慣れない恋愛小説なんぞ読むべきではなかった。

魔理沙や霊夢が聞いたら腹を抱えて笑い死ぬか、永遠亭の医者と呼ばれていただろうな。

兎に角忘れよう、うん、それがいい。

忘れられないなら、そろそろ来るであろう彼女に食べてもらえばいい話だ。

先程からちらちらと見える特徴的な帽子を被った彼女にね。

~~~~~

「すまない、遅くなった」

特徴的……いや、チャームポイントとも言える帽子を被った少女、上白沢慧音は、予想通り必死に走ってきたのだろう、乱れた呼吸を戻そうと、必死に酸素を吸っている。

やれやれ、夜道を照らしてくれる光があるとはいえ、獣道に近いこの道を提灯も持たずに走ってくるとは、無謀というか何と言うか。職業柄時間に遅れるのは仕方ないのだから、そこまで必死にならなくてもいいだろうに。

几帳面過ぎるんだよな、別に悪い意味ではないけれど。

「しかし正直驚いたよ、君が誘ってくるなんて」

慧音は普段からあまり酒を口にしない。

そんな彼女から誘われたのだ、驚かないと言ったら嘘になる。

「ああ、何となくお前と飲みたくなってな」

「愚痴を聞いてもらうには最適だからか」

「い、いや、そういう訳じゃないぞ」

凶星か。

彼女に限らず僕の知っている少女達は何かと愚痴を言いにわざわざ店を訪れたりする。

人をゴミ捨て場か何かと勘違いしてるんじゃないだろうか。

その上散々どうでも良いことを言い終えると、何も買わずに帰ってしまうのだから。

僕的时间を返してほしいものだ。

「……まあ、わざわざ誘ってくれたんだ、愚痴の一つくらいは聞いてやってもいい」

左から右へ聞き流すけどな。

「……ああ、ありがとう霖之助」

何より、君の笑顔が見たいから……って違う！

「……どうかしたか？」

「い、いや……気にしなくていい」

今すぐ忘れるから。

心の奥に嚴重に鍵をかけて土を被せておくから。

「？」

〵〵〵

迷いの竹林と呼ばれる鬱蒼とした竹林の近くに構える屋台。

其処は、夜雀の妖怪ミステリア・ローレライが切り盛りする焼き八目鰻屋で、独特の風味と歯応えが酒によく合うため、毎日足を運ぶ客も少なくないとか。

「ミステリア、邪魔するぞ」

「あれ、慧音先生が来るなんて珍しいね〜……ん、香霖堂の店主と一緒に事はもしかしてデー、」

「違う、断じて違う!」

……冗談なんだからそこまでムキにならなくてもいいだろうに。

「取り合えず、熱爛と鰻を適当に焼いてくれ。」

……慧音もいい加減座れ」

「むづ……まあいい、私も彼と同じのを頼む」

「う、うん、かしこまりました」

そそくさと僕等の視界から消える女将ミスティア。

……なんか長ったらしくて嫌だな。

おかみすちー……馬鹿にしているのかと言われそうだ。
普通に女将でいいか、うん。

「はい、熱爛おまちどおさま」

「随分早いな」

「うん、うちはお酒は手早くお出しする主義だからね〜。
お酒さえ出しておけば乾杯とかできるでしょ?」

成程、確かにまずは一杯と思うのが酒飲みだよな。
流石女将、伊達に客商売をしていない。

「鰻はもう少し待ってね、すぐ出すから」

「ああ、頼む。

……それじゃ、乾杯するか」

「ああ、乾杯」

チン、とお猪口鳴らしそのままくいつと一口。
冷えた身体に酒がじんわりと染み渡る。

「美味しい」

「ああ、これなら何杯でもいけそうだ」

「おいおい、ほどほどにしておけよ」

「大丈夫だ、その辺はちゃんと考慮するさ」

ならいいが……。

魔理沙みたいに泥酔して家まで送る羽目に……なんてのは御免だぞ。

「……ところで、最近はどうなんだ、店は上手くいっているのか？」

「まあ、生活に困らない程度にはね」

お客じゃない客人ばかり来るけれど。

何も買わない、お茶菓子は食べ尽くす、時々品物をちよるまかして
いく迷惑極まりない子達がね。

「でも、それも充実した暮らしの中に無くてはならないものなのだ

るろう？」

「いや……うむ……」

確かに、霊夢や魔理沙みたいな客人が来ないというのもそれはそれで寂しいのかもしれない。

迷惑は無いほうが勿論いいがね。

「それに、君の所に来る客人は皆、君を半人半妖ではなく森近霖之助として見てくれているのだから……」

酒を注ぐ慧音の表情が強張る。

「霖之助……どれだけ人の為に尽くしても、どれだけ人と親しくなっても、所詮私は半獣、忌み嫌われる存在なのか……？」

「……………」

彼女の真剣な眼差しが僕を貫く。

心なしかその目には涙が浮かんでいるような気がする。

恐らく、また自身の半人半獣ということについて何か言われたのだろう。

彼女は教師だ、人との触れ合いはそれこそ無限にある。

つまり、良い噂も悪い噂も沢山耳に入ってくるのだ、今回はその、悪い噂が入ってきたのだろう。

僕なら適当に受け流してしまうが、彼女は良くも悪くも生真面目だからな、そういう融通が利かない……いや、その融通を知らないのかもしれない。

「しかし、君のそういった事についてとやかく言う輩は少数だろう、

人里の大多数の人間は君を理解しているはずだが？」

「……確かに、昔から比べれば皆私を受け入れてくれていると思うんだけど……」

「君は人間全てに慕わりたいのかい？」

「違う！……違う、ただ……教え子の一人に「怖い」と言われたのが……悲しくて……」

今まで必死に抑えていただろう大粒の涙が彼女を濡らす。

やはり、相当深刻に悩んでいたみたいだな。

子供というものは時に残酷だ、彼等は見たり聞いたりして思ったこととをそのまま口に出す習性がある。

決して悪気がある訳ではないから、それで相手が傷ついたとしても気がつかないのだ。

慧音も教師である以上その辺は理解しているのだろうが、面と向かって言われると、辛いものがあるのだろう。

僕はそつと懐にあるハンカチを彼女の前に置いた。

「確かに、君は満月になると姿を変える、それは人間から見れば恐ろしいものなのかもしれない。

以前僕も人里にいた頃よく言われたよ、”混ざりもの”ってね」

「……………」

「そして結局僕はこんな人ならざる者のいる所に店を構えた。もしかしたらどこかでそう言われたのが嫌だったからなのかもしれない」

「……確かに、今でも君の事を薄気味悪いと言う者もいる」

「だろうね、……でも、君は違う」

「違う……?」

「そう、君は僕のように逃げず、人間との繋がりを保とうとした。これまでにどんな苦勞があつたかなんて僕が知る由も無ければ、知る権利もないだろう。」

「だけど、そうした苦勞を君が乗り越えたからこそ、今の君があるの
だろう?」

「……………」

「君は立派な人里の住人であり、守護者だ。」

「確かに未だに君を良く思わない輩もいる、だが、彼等は君、上白沢
慧音を知らないだけなのかもしれないだろう?」

「私を、知らない……?」

「だから、先入観で怖いと思うのかもしれない。」

「でも、それなら君が教えてやればいい、教師として、上白沢慧音と
して、ね」

「残っていた酒を飲み干す。」

「酒はすっかりと冷たくなっていたが、今はそれが心地よく感じた。」

「……………ありがとう、霖之助。」

「……………そうだな、私は教師だ、分からないのなら、ちゃんと教えれば
いいだけのことだものな」

慧音の顔から涙が消え、笑顔が戻る。

「終わったみたいね、はい、八目鰻。」

お酒も冷えちゃったでしょう、熱いの持ってきてあげる」

出るタイミングを見計らっていたのか、女将がすっと現れた。

こういった事は少なくないのだろうか、随分慣れているようだな。
流石は女将。

「よし、今日は飲むぞ霖之助、私のおごりだ！」

「ははは……程々にね」

どうやら、いつもの元気を取り戻したみたいだな。

やはり、彼女は明るい方がいい、その持ち前の明るさと優しさがあつたからこそ、今の人間との信頼関係があるのだから。

「ほら、ぼーっとしてないでお猪口を出せ」

……ああ、これは家まで送るフラグが立ってるな。

まあ、奢って貰ったお礼ということで手を打つか。

並々と注がれる酒を見ながら、僕はため息をついた。

星空の下で晩酌を（後書き）

あやや……また更新がががが。

取り合えず言い訳をしますと、最初に執筆していた話がいい所までいったのに……

「問題が起きましたのでネットを強制終了するZ E」

「（。。）」

……となり、不貞腐れてました。

ごめんなさい。

そういえば、最近愛読している小説に P V 記念とかありますが、

P V ってなんなのでしょうか。

p t とは違うのかな。

まあ、どうでもいいですね。

とりま、ご意見ご感想募集中ですよ。

ゴミ箱に紙くずを投げ入れる気分で書いてくださいませ（お

それでは、今後ともご贖肩に。

迷子の少女と出会ったら

雲が殆どない快晴。

ここ数日はずっとそんな良い天気だった。

そんな気持ちのよい日が続くと、動かない古道具屋などと心外な二つ名をつけられている霖之助も、色々な面倒事を片付けようと、重い腰を上げる。

洗濯、掃除、そして修繕。

魔理沙と霊夢の山のような服を見て、霖之助は大きく溜め息をついた。

妖怪退治の専門家やら、魔法使いやらと呼ばれようと、所詮まだ子供、基本やんちゃなあおの二人は好天気なのをいいことに、次々と服を破いて来るのだ。

「……………此処は修繕屋じゃないんだけれどな」

誰もいない店内で小さく文句を呟くと、霖之助は引き出しから裁縫用具を取り出した。

カラン

来客を告げるベルが鳴ったのはその時である。

「……………えっと、あの」

知り合いの少女達とは違い、店の戸に身体半分を隠したまま店内を見回す少女に霖之助は少々面食らった。

「……や、やあ、いらっしやい」

「わわっ」

努めて優しく声をかけたつもりだったが、少女はびくつと身体を震わせると、

バタンツ

そのまま戸を閉めてしまったのだった。

「……参ったな」

霖之助は小さく溜め息をつくつと、ゆっくりと腰をあげた。

見たところ妖精ではなさそうだったから悪戯の線はないだろう。

だとするば何か事情でもあるのだろうか。

ガラクタをいじる音が聞こえ始めたのに苦笑しながら、霖之助ゆっくりと戸を開けた。

「僕の店に何か用かな」

「えっ、わわっ」

霖之助の声に少女はまたびくつと身体を震わせ、不安そうに紅い眼差しを向けた。

黄金に輝く髪に、どこか見覚えのある帽子と、赤を基調とした活発な雰囲気のある服装。

そして虹色の羽。

「……もしかして君は、紅魔の吸血鬼じゃないかい？」

「う、うん」

まだ不安そうな表情のまま、少女が頷く。

吸血鬼が昼間出歩くのは見慣れた光景なのだが、それでも日笠はさしていた。

しかし少女は見たところ手ぶら、日笠も何も持っていないのだ。

何処かで落としたのであろうか。

「取りあえずこのまま日光に当たっているのも嫌だろう、店に入るといいよ」

「いいの？」

「ああ、歓迎するよ」

少女の顔からやっと不安の色が消えたのを見て、霖之助はまた小さく溜め息をついた。

く
く
く

「わあ、面白そうなガラクタが沢山あるね」

「一応全て売り物なんだがね」

「そうなの？」

少女、フランドール・スカーレットは虹色の羽を忙しなく動かしながら、棚に並んでいる商品を興味深そうに見つめている。

さて、紅魔館の主の妹である彼女が何故単身こんな魔法の森近辺をうろろろしていたのか。

「お姉様とはぐれちゃったの」

いつの間にか霖之助に視線を移していた彼女がさも大した事ではなさそうに答えた。

「……人の心を読まないでくれないか」

「心なんて読めないよ、表情に書いてあっただけ」

そんなに考えている事が顔に出やすいのだろうか。

そういえば、いつぞや妖怪の賢者にも同じ事を言われた気がする。

「……まあいい、それで、どの辺りではぐれてしまったんだい？」

「うーん……屋敷を出て……少し行った所」

アバウトすぎる答えに霖之助は頭を抱える。

これでははぐれた場所まで送ってやるという選択肢は選べそうにない。

紅魔館まで送るのが本来は良いのだろうが、霖之助は敢えてその選択肢を考えなかった。

以前、商品を配達しに行った時、アフターケアと称して色々と仕事を押し付けられたからである。

また同じ目に遭うのは御免だった。

「……まあ、しばらくすれば迎えがくるだろう、それまでのんびりしているといい。 ああ、今お茶を持ってこよう」

そう言つて、奥からお茶とお菓子を取り出した。

どちらもかろうじて霊夢に見つからなかった上物だ。

「あれ、このお茶紅くない」

「おや、紅茶の方が良かったかな」

「ううん、これでいいよ」

紅魔館では緑茶はあまり出さないのか、フランドールは興味深そうに見つめた後、ゆっくりと口に含んだ。

「美味しい」

「それは良かった」

「お菓子も、食べていいの？」

「勿論、好きなだけ食べるといいよ」

「ホント？ わーい」

ぱあっと明るい笑顔を浮かべながら、フランドールはお菓子にかぶりついた。

どうやら、先程まで浮かべていた不安は綺麗に消えたようだ。

霖之助はほつと胸を撫で下ろすと、やりかけのままだった修繕の作業に取り掛かった。

修繕、修理とは、その壊れた部分を上塗りなどして隠してしまえば終わり、という訳ではない。

直したのが分からないよう見せるのも勿論だが、再びそれを使うとき、また壊れることの無いようしっかりと強度を与えてあげるのも大切なのである。

ましてあのやんちゃ盛りの二人だ、せめて同じところがまた破れることがない程度には直してやらないと、後々面倒なことになる。

「ねえ」

「うん？」

「何してるの？」

気に入ってくれたのだろうか、美味しそうに淹れたお茶を啜りながら、フランドールは霖之助の手を見つめた。

「ああ、修繕……まあ、簡単に言うと、服を直しているんだ」

「直す？ 服なんて壊れたらまた買えばいいじゃない」

確かに、紅魔館のお嬢様ともなれば、破れた服を直して使うなんてことはしないだろう。

「まあ、その通りなんだが……物というものは、何もないとこから何かを作るといいうのは大変だね、直したり改良したりした方が楽なんだ」

「ふうん……よく分からないや、どうせすぐ壊れちゃうのだもの」
「……そうか」

フランドール・スカーレットあらゆるものを破壊するという危険な能力を持つ……だったか。

霖之助は以前館のメイド長である咲夜が言っていた事を思い出した。妹様はその危険な能力のせいで、気の遠くなるような時を地下で過ごしていたのだと。

しかし、最近になってやっと地下から出ることを許され、自由になったのだと。

つまり、彼女は生まれたばかりの赤子とあまり変わらないのだ。ただ唯一していることは、「破壊する」という哀しいことだけ。

「……フランドール」

「何？」

「見ているばかりでは退屈だろう、君も何か……そつだな、何か作ってみないかい」

「私か？」

「ああ、分からなければ、僕が教えてあげるよ」

そつ、知らないのなら教えてあげればいいのだ。

彼女は決して危険な存在ではない、ただ何も知らない無垢な子なのだから。

「……うん、やってみたい」

「よし、それじゃ、何を作ろうか」

久々の高揚と、懐かしい気持ちを感じながら、霖之助はふっと微笑んだ。

~~~~~

カラン

「店主、ここにフランが来なかった、」

「おやレミリアか、いらっしやい」

「あ、お姉様」

あれから随分時間が過ぎたようで、外を見ると真上にあつた太陽はいつの間に紅い夕焼けに変わっていた。

「……はあ、まさか一番期待していなかった所にいたなんてね」

と、大きなため息をつくレミリア。  
随分な言い草である。

だが、彼女の服にある無数の汚れを見て、霖之助は笑みを零した。

「何よ」

「いや、いい姉だと思ってね」

「何の事かしら、……フラン、帰るわよ」

「うん、ちょっと待って」

フランドールが急ぐように手を動かした、最後の仕上げである。

始めは危なっかしく冷や冷やしたが、子供というのは覚えがいのだろう、一度コツを掴むと霖之助も驚くほどの上達を見せ、そして見事に作り上げたのだった。

「見てみて、お姉様」

吸血鬼にこの表現はおかしいのかもしれないが、フランドールは太陽のような明るい笑顔でレミリアに駆け寄った。

「あ……」

彼女が差し出したのは姉、レミリアの小さなマスコット。

始め霖之助は折り紙辺りにしようかと考えたのだが、フランドールがどうしても裁縫をやってみたいと言い張り、最終的にマスコットに決まったのだった。

少々難易度が高すぎるのではないかと思ったが、その中々の出来具合を見れば、それは取り越し苦労だったのだと悟る。

「お姉様？」

「えっ、あ……ごめんなさい、とても上手に出来ているわ、フラン」

「えへへ、ありがとう」

レミリアの瞳に涙が浮かぶ。

だがそれを笑うのは無粋なことだ、霖之助はそっと目を逸らした。

「それじゃ、世話になったわ店主」

「ああ、またおいで。 フランドールも」

「フラン」

「うん？」

「フランって呼んで。 余所余所しいのは嫌」

「そうだね。 またおいで、フラン」

「うん」

「……ああ、そうだ」

霖之助はふと思い出すと、店の奥へと戻り、食べきれなかったお菓  
子を持ってきた。

「お土産だ、持っていくといい」

フランは嬉々として受け取る……と思ったが、伸ばした手をふと止  
めると、ゆっくりと首を振った。

「ううん、次に来る時まで残しておいてよ、また緑のお茶と一緒に  
食べたいから」

「そうか、分かった、しつかり残しておくよ」

「それじゃまたね、……店主さん」

レミリアと共に夜の近い空へ飛び上がると、フランは香霖堂が見えなくなるまで、手を振り続けたのだった。

~~~~~

「こんにちは、霖之助さん」

「いらっしや、なんだ、霊夢か」

「服は直ったかしら」

「勿論、だがね、君も女の子なんだ、もう少し恥じらいというか」

「はいはい、お茶頂くわね。……あれ？」

「……どうかしたかい」

「この御煎餅、名前が書いてあるのだけど」

「ああ、それは食べちゃ駄目だよ、大事な約束のものだからね」

迷子の少女と出会ったら（後書き）

……やつと書けた（汗

今まで使っていたPCが天に召されて、やつと新しいPCを買ったけれど、大学やらなんやらで暇がとれず、気が付いたらもうこんな
に……orz

いや、何と言いますか、申し訳ございません。

この一言に限ります、はい。

私ってSS書くの向いていないんじゃないかな。

まあ、そんな愚痴、自己嫌悪はおいておいて。

これからはまたそれなりのペースで書いていけると思っているので、「仕方ねえ、今回限りは許してやるよ」という、イエスも裸足で逃げ出すような慈悲をお持ちの方は、また目を通して頂けると嬉しいです。犬めは必ずその御恩に報いて見せます（おい

それでは、今後ともご贖員に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263j/>

魔法の森の古道具屋さん

2011年9月22日17時54分発行